

質問題

提出者 岐阜縣 田口由之助

婦人の側より見て理想的の夫とは、如何なる資格を具備せしものなるか

右投稿へ切期限十一月十五日のこと。



十月の天地

ま、か 生

天澄み、風清くして、氣色日を逐ひて靜肅、方にこれ散策の……涼乗の好季節となりぬ。

穰々たる黃稻野に滿ち、案山子毅然として金波の中に立ち、彼方の鳴子突然鳴り動き、雀群大に

驚き起つ、熟視すれば町餘の此方籬の中にて繩を引ける童あるなり、當年どつて僅に六歳許、人里遠き山際には終夜いぶせる煙太からず搖曳し、猪、猿など爲に稻の穂を荒す能はず。

農夫欣然として鎌を磨ぐ、將に熟稻を刈らひとするなり、月の中旬、六尺の大男、荷ひ來る稻の丈地を曳かひばかりなり、得意思ふべし、粒々皆辛苦に對する報酬なればなり。

麥時、頓て始まるべし、多忙いはむ方なし、老幼男女鋤鋤を手にして之に當り、紳々餘裕あり。

大麥、小麥、油菜、小松菜、蠶豆、豌豆、夏午莠、人參など亦相前後して、種を下すべく。木賊、牡丹、芍藥、櫻、柿、桃の植替。葡萄、野木瓜、牡丹などの種木及び挿木等、亦此頃を可とす。

千草漸く凋落し、蕎麥の花、雪の如く咲き、菊

は近く雷を破らむとす。

里近き柿は緑より黄に、紅を帯びて熟せむとし
山鴉來り誤つて溢柿を啄いて其黒き顔をしかむ、
蟹あり、小溝の岸の叢より窺に太き腕を出して落
ちたる柿を引かむとす。谷なる栗は奮然として毳
囊を破りて躍り出で、栗鼠莞爾として現はる。麓
なる蜜柑は綠葉中に黄點し始め、鶴山奥より出で
來る。根室の濱宗谷の邊、蛙潑刺として躍る。

十五日、銃獵期に入る。數行の鴻鴈列を正して
北より來る。昔は遠征途上、晩秋の月三更、粟を
横たへて詩を賦したる丈夫あり、今は拂曉に銃口
を擬して一發、其妹背の一羽を射落さむとする所
謂紳士といふものあり。

蚯蚓の聲止んで蛙亦土中に潛み、蜻蛉亡びて蟋
蟀作れ、黄色の微光を止めて夕陽は没りぬ、空は

青黒みて、芒に慄く北風いたく身に泌み渡り、四
顧寂寥として唯吾獨存す。西行曰く、心なき身に
もわはれは知られけり鳴たう澤の秋の夕暮。芭蕉
曰く、枯枝に鳥のとまりけり秋の暮。

晝間、益讀書するに適し、燈下には更に親し
き心地す、半宵古英雄偉人の傳記を繙きて慨然
として長嘯するものあるべく、節婦烈女の事跡を
讀みて、荒くれ男兒の頬邊時ならぬ時雨ふるとも
あらむ。

長安一片月、萬戶擣衣聲、昔佳人を泣かしめた
りき月は千門を鎖ざして靜なり折しも起る遠郊の
笛聲には、清涼今尙ほ人の骨に徹す。猛虎一嘯し
て全谷轟き、山月凜として高し、烈夫蹴起して鏘
として劍に聲あり。

朝霧一帯の中、青山遠く突兀として其巔を現は

し近き堤上の並木朦朧として辨し難し、音わり、曉風に馬を驅つて清流に入れたるなり。

穎敏な娘と母の愛讀の書

Y、 I、

合衆國の西の方にわたる田舎に一人の婦人の教師がありましたが、或時この婦人の學校へさる一家族から四五人の子供が入學致しました、然るに此四五人の中唯一人を除く外は皆遲鈍で亂暴で、申さば全く無賴漢とでもいふべきでした。で、この子供達の両親といふは、まことに貧乏な無學な下等社會の人々でしたが、さてひとりの例外な子供といふのは女兒であつて至て上品な穎敏な兒として在學中著しく發達しました。

そこで、女教師先生はかくも兄姉達と違つて居

るこの女兒に付いては、定めて何か理由のあることであらうとおもひましたから、だん／＼と母親に聞て見ますけれども一向わかりませぬ、たい母親の申しますには私の子供たちは皆この淋しい所で、同じやうに成長し同じやうに扱はれいづも一所に居て少しも別れたこともありませんとまづこちらなのです。

母親はこの娘がその兄や姉達と大變ちがつて居ることは氣付て居りましたけれども、さてなぜであるかといふことは一向存じませんでした。

そこで、教師はさらに母親にむかひ、この女兒が胎内にある時、母親の生活の有様に他の子供の時ど何かかはつたことはなかつたかと尋ねますと、母親は決して何事もありませんでしたと答へましたが、稍考へて後「ア、唯一つちよつとし

たことがありましたが……而しこれつばかりのことは何の關係もありません。それはかうなので、ある日私の宅へ一人の行商が來ましたが、この商人の持て居た書物の中に一つまことに美はしい赤い表紙の詩の本がありましたから私はそれがほしくつてはしくつてたまりませんでした、けれどもどうく良人が買ってくれませんが、そのうち商人は行ってしまいました、私はどうしてもこの本を思ひ切ることが出來ませんでしたから、夜になつてから自分の金をとり出して、そつと家を出で、隣の町まで歩いて行って、行商を目附けだしましてその本をかひ夜の明けないうちに家に歸りました、それからといふものは此本をいくどとなく繰りかへしてはよみ、くりかへしてはよみほんどうにこの娘の生れるその日まで、殆んど毎日よみま

した、理由といへばまゝ是れ丈けのことなのです」
と答へました。

幼稚園を出た児童と家庭から行つた児童との學校での

成績の比較

此問題は頗興味あるものとして世間の人が、多く知らうとしてゐるのである。勿論統計をしたからつて漸二十人位の子供の數にするのだからとどて、これを強いてどつちかの原因に歸するとは、無理でもあらうし、又夫で強成績の良否を一刀兩斷に決めて仕舞ふ譯にも行くまい、が、大体の方向が幾らか知れぬでもないから、左に比較表を擧ることにした。

附記、左表は本年三月試験の成績を兩高等師範附屬學校について調べたので、十人未満の數のは省くことにした。尙通覽の便のために學科を文科的理科的及技藝的に別ることにした。

女子高等師範學校附屬小學校
尋常科一學年

| | | | | | | | | | | |
|-----|---|------|------|------|----|----|----|----|----|----|
| 比較強 | 幼 | 家庭 | 幼稚園 | 在園人員 | 文科 | 理科 | 技 | 藝 | 科 | 全學 |
| | | | | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 | 年 |
| 二 | 二 | 一九七五 | 二二七六 | 二五 | 八九 | 八六 | 七九 | 八〇 | 八七 | 八七 |
| 一 | 一 | 八二 | 八六 | 二 | 七九 | 八〇 | 八七 | 九〇 | 八四 | 八七 |
| 四 | 四 | 一 | 七五 | 八 | 七五 | 七二 | 七六 | 七五 | 七九 | 七九 |
| 一 | 一 | 二 | 七六 | 二 | 七五 | 七二 | 七六 | 七五 | 七九 | 七九 |
| 二 | 二 | 八 | 七五 | 四 | 七五 | 七二 | 七六 | 七五 | 七九 | 七九 |
| 二 | 二 | 八 | 七五 | 九 | 七五 | 七二 | 七六 | 七五 | 七九 | 七九 |
| 二 | 二 | 八 | 七五 | 九 | 七五 | 七二 | 七六 | 七五 | 七九 | 七九 |
| 二 | 二 | 八 | 七五 | 九 | 七五 | 七二 | 七六 | 七五 | 七九 | 七九 |

同高等科第二學年

| | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|------|---|----|----|---|---|---|----|
| 比較強 | 家庭 | 幼稚園 | 在園人員 | 年 | 文科 | 理科 | 技 | 藝 | 科 | 全學 |
| | | | | | | | | | | |
| 二 | 三三三 | 二二二 | 二二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 一 | 三三三 | 二二二 | 二二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 二 | 三三三 | 二二二 | 二二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 二 | 三三三 | 二二二 | 二二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 二 | 三三三 | 二二二 | 二二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 二 | 三三三 | 二二二 | 二二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 二 | 三三三 | 二二二 | 二二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |
| 二 | 三三三 | 二二二 | 二二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 | 二 |

(以下次號)

旅の土産

澤生

(一) 鹽焼く爺

平たい野原を東になして、西には蘆間にボツリ
 と家が見え、中を流るゝ藻屑川、ユラリと
 と小舟を浮けて、波のまにゝ今太公望の鯉釣を
 後に残して南に向けば、蘆邊の鶴の二つ三つ今も
 長閑に遊ぶなる和歌の浦邊は右に見え、左の岸な
 る葦の上、茅の屋根の片隅より昇るは名に負ふ三
 葛海士の鹽たく煙なり、煙と煙、鹽焼く煙、舟を
 繋ぎて岸に上りて見渡せば、名草の山の楚まで坦
 々たる鹽田幾頃區劃正しく碁盤の如く、中に三
 四の茅屋バラと散在す、柴の戸たゝされどな
 へば、出て來し爺は六十近く我等の來意を聞き終

り、いと心安げに打出で、

鹽田は見らるゝ通り泥土をたゝきて平しれり、
 細砂を一面厚からず敷く、御身が上つた岸の下
 に大きな土樋が開いてある、潮満つれば其樋口
 より此田の中にさし入つたのを、退潮の前に樋
 を塞ぐ、そこで鹽田一面潮の海、磯どくる夏の
 大陽の燒き日出の後の名草の山の山嵐快涼しさ
 夕の和歌の海風、など遠慮なく此池の水分を奪
 つて行き、砂に残るは鹽分ばかり、それから……
 と爺は田の中の小高さ方形の土臺を指して、
 彼の臺に砂を掻きよせ山に積み、更に新たに鹽
 水をくみ來りて之に注がば、鹽分溶けて滴り落
 つるを一方に受け置きて、櫓桶に之を汲みとり
 て、

と言ひつゝ、蘆の中なる例の小屋に向きなほり、我

等を内に導きて、二間に一間半の方形で深さ六七
 寸の鐵の釜に、今や沸々煮えかへる鹽水に浮び轉
 がる褐色の泡を汲みどりながら、

かよう下から燒き始め、大抵一晝夜足らずにて
 水分は蒸氣になつて終ふ、跡に眞白の食鹽が厚
 い板のやうになつて残る、それを俵にして送り
 出す、御身等がいふ煙の見ゆるは此竈の下から
 出る煙、燃料は今は大抵石炭を燒く、此處は尤
 も薪で御座る、

など鹽燒く爺には、さして辛さも知らぬ様子、さ
 てさて煙に煤ばつた面黒い爺かな、我は爺の厚意
 を謝して舟に歸つて、風と波とに送られて和歌の
 浦邊に上つたのは去りぬる八月中頃のとなりき。

第十九統計年鑑で繰出して見れば、食鹽の主な
 る産地は左の通り、

| 縣名 | 田 | 産額 | 價額 |
|-----|---------|------------|-------------|
| 千代田 | 三〇三、一 | 七五、六、五〇 | 一〇、九、二五〇 |
| 愛知 | 二六、五、九 | 二五、八、〇〇 | 二、六、六、〇〇 |
| 石川 | 二九、一、六 | 二七、〇、〇〇 | 二、四、〇、〇〇 |
| 兵庫 | 九六、八 | 八、五、四、一五〇 | 九、六、五、二〇〇 |
| 岡山 | 五〇、〇、二 | 六、〇、五、五〇 | 六、九、〇、〇〇 |
| 廣島 | 六〇、〇、〇 | 三、五、一、九〇〇 | 八、二、五、三〇〇 |
| 山口 | 一〇七、五、四 | 一、〇、五、六、五〇 | 一、三、七、七、四〇〇 |
| 徳島 | 五三、三、九 | 四、二、二、二六 | 四、〇、五、九〇 |
| 香川 | 八七、五 | 一〇、六、〇、〇〇 | 一、三、七、〇、〇〇 |
| 愛媛 | 三六、一 | 五、二、二、三〇 | 三、七、五、〇〇 |
| 長崎 | 六六、〇 | 二、六、六、五〇 | 一、四、〇、六、〇〇 |
| 福岡 | 二六、三、二 | 二、六、五、五二 | 三、三、八、八〇 |
| 熊本 | 二五、〇、九 | 一、九、七、七六 | 五、一、九、九〇 |
| 大分 | 二六、九、九 | 一、九、七、七六 | 二、七、二、二〇 |

北區及び北海道並沖繩は概して少額で、臺灣の額は統計には未だのつて居ないが、からい話は一先これで。



●女子美術學校

本年四月本郷弓町に設立したる同校は追々盛大に至り、既に二百餘名の生徒ありて校舎の狹隘なるが爲に、先月來新入學を謝絶し居れる程なるを以て、更に駒込太田の原に新しい校舎を増築し差當り尙五六百名の生徒を容るべき設備を整へ且寄宿舎をも擴張して大いに地方より入學者に便せむとし目下専ら準備中なりといふ同校は日本畫、洋畫、彫塑、造花、刺繡、蒔繪及裁縫等の諸科を設け女子に適する高尚優美なる技藝を授け且之に關する諸學科を教ふる由にて、其の授